

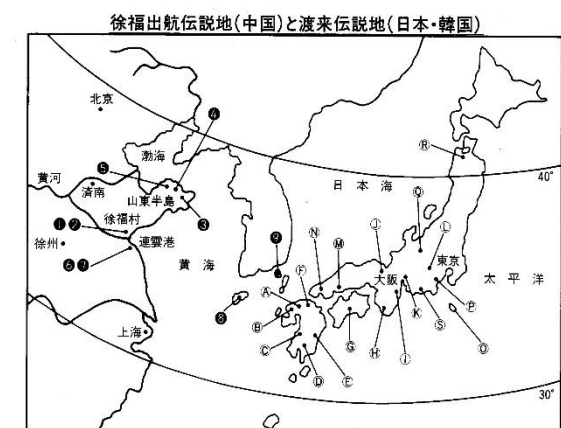
神奈川の徐福伝承

207.08.23 前田豊

1. はじめに

秦の始皇帝の時代に不老不死の霊薬を求めて、蓬莱の国・日本列島に渡ってきた徐福のことは、近年益々注目されるようになってきた。

「史記」によれば、徐福一行が目指したところは、蓬莱、方丈、瀛州とよばれる三神山の地であるが、その蓬莱の地がどこかということについては、各種異論が提出されている。徐福は伝説の人で、実在しないという説もあるが、しかし中国、韓国、日本には徐福の事跡をもつ地が多数存在しており、徐福の歴史的事実性は疑いなくなくなっている。



- 飯野孝宥著「弥生の日輪」(新人物往來社)より引用
- ① 在 韓 國 伊 萬 里 市 波 多 (琴) 津 町 / 山 内 町 / 鎭 守 北 大 志 大 漢 宮 / 武 進 市 / 有 明 町 / 鎭 富 町 寺 井 津 / 浮 釜 の 上 陸 伝 説 / 金 立 龍 現 金 立 神 社 の 徐 福 神 像 / 佐 賀 市 (徐 福 研 究 会)
 - ② 熊 本 県 熊 本 市 / 八 代 市
 - ③ 鹿 兒 島 県 串 本 市 / 照 島 / 霧 岐 止 の 徐 福 廟 / 島 平 浦 / 孫 岳 / 梁 尾 山 / 須 幸 院 庭 園 / 坊 津 町 定 宮 輪 樂 宮 崎 市 住 川 町 / 徳 岡 市 の 徐 福 石 之 福 殿 樂 八 女 市 堂 男 山 古 墳
 - ④ 高 知 県 須 崎 市 / 佐 川 町 の 虚 空 蔵 山 公 園 / 紫 折 神 鐘 々 峰
 - ⑤ 和 歌 山 県 新 宮 市 の 徐 福 廟 と 徐 福 墓 (新 宮 徐 福 協 会) / 太 地 市 補 船 伝 説
 - ⑥ 三 重 県 熊 野 市 / 波 田 須 上 陸 遺 跡 (豪 徳 保 存 会)
 - ⑦ 京 都 府 丹 波 半 島 / 伊 弉 册 新 井 崎 神 社 の 童 男 童 女 神 像 / 河 米 見 三 重 県 / 冠 島 / 加 賀 町 鹿 野 寺
 - ⑧ 畿 内 県 熱 河 市 蓬 萊 伝 説 / 小 坂 井 町 瓦 屋 神 社 / 御 津 町 東 三 河 渡 上 陸 伝 説 / 家、 羽 田 町 多 志
 - ⑨ 山 梨 県 安 土 吉 田 市 (本 文) / 河 口 湖 町 徐 福 社 の 山 乞 地 蔵 / 山 中 湖 村 浅 間 神 社 / その他 古 文 書 多 数 / 北 郡 留 部 上 野 原 町 の 不 老 薬 伝 説
 - ⑩ 廣 島 県 宮 島 町 巖 島
 - ⑪ 山 口 県 祝 島 の 不 老 薬 キ ャ ー イ 渡 来 伝 説
 - ⑫ 東 京 都 八 丈 島
 - ⑬ 神 奈 川 県 藤 沢 市 妙 善 寺 / 三 浦 半 島 一 帯
 - ⑭ 愛 知 県 小 泉 郡 和 田 村 (本 文)
 - ⑮ 青 森 県 小 泊 村 尾 崎 神 社 の 徐 福 神 像
 - ⑯ 野 郎 県 三 保 の 松 原 の 羽 衣 伝 説
- ※ その他各地に徐福研究会、遺跡保存会多数 (新宮市、奥野利直氏提供)
- ① 江 蘇 省 海 陽 港 市 徐 福 廟 / 韓 城 限 秋 水 海 港 出 航 遺 跡 / その他 多 数
 - ② 遼 寧 省 瀋 陽 市 小 王 巧 村 徐 福 船 出 港 遺 跡 / 徐 福 の 故 郷 遺 跡
 - ③ 山 東 省 濰 縣 市 城 東 郡 登 雲 門 / 徐 福 船 出 航 地
 - ④ 廣 東 省 肇 慶 市 河 雲 村 黃 河 宮 の 古 港 遺 跡 / 徐 福 船 出 航 遺 跡
 - ⑤ 最 後 台 青 島 市 膠 州 南 嶺 口 亭 海 人 廟
 - ⑥ 接 部 港 出 航 遺 跡 / 船 隻 帝 孫 見 地 / その他
 - ⑦ 濟 州 島 船 河 通 過 / 補 船 遺 跡 / 殘 留 三 柱 穴 伝 説 / その他
 - ⑧ 巨 濟 島 通 過 伝 説 (『人民中国誌』提供)



- ① 藤 沢 市 : 妙 善 寺 ・ 福 岡 家 墓 碑 (徐 福 子 孫)
- ② 秦 野 市 : 加 羅 古 神 社 (横 野、 唐 子 大 明 神)
曾 屋 神 社 (乳 牛、 唐 子 さん)
宝 蓮 寺 (義 毛、 大 日 堂、 唐 土 伝 来)
大 山 阿 夫 利 神 社 (大 山 祇 神 = 酒 解 神 = 秦 氏 神)
- ③ 藤 野 町 : 三 柱 神 社 (唐 土 明 神)
- ④ 寒 川 町 : 寒 川 神 = 大 山 祇 神、 富 士 古 文 書

神奈川の徐福伝承地

2. 徐福伝説とは

富士古文献によれば、「徐福」は、秦始皇帝の命を受け、不老長生の霊薬を求め東海の3神山に向けて船出した。秦始皇帝の時代、方士徐福を長とする百工、童男童女を含む3000人を乗せた85隻の大船団で、弥生時代の日本を目指した先進文明を伝える一行であった。

徐福一行が目指したところは、蓬莱、方丈、瀛(えい)州と呼ばれる蓬莱の国・3神山の地であった。その蓬莱の地は、台湾、韓国、日本、はたまたアメリカ大陸というが、中国、韓国、日本には徐福伝説をもつ地が多数散在しており、徐福の歴史的事実性は、疑えない。日本にも20か所以上の徐福上陸地や伝説が存在する。その地は、佐賀県、紀伊半島、熊野、富士山北麓吉田(徐福の墓)などである。

3. 神奈川の徐福伝承

藤沢市・妙善寺の福岡家墓碑

妙善寺の福岡家の墓碑は、徐福研究家・奥野利雄氏著「ロマンの人・徐福」(学研奥野図書、平成3年4月10日発行)、p119-121)に取り上げられている。

神奈川県徐福研究会の河野氏らは、文面を写しとって研究会で紹介。徐福研究作家・池上正治氏が解説。墓碑内容は、つぎのようであった。

故人はいみ名を肅政と称し、俗名を正兵衛という。その祖先は、秦の徐福から出ている。

徐福は、始皇帝の戦乱を避けて海を渡航し、我が神州(日本)まで来て、富士山の周麓に場所を選んで下り住む。それ故、子孫は皆、秦を姓とした。福岡を氏(うじ)と為すものは、また、徐福の一字を取ったのである。且つ、近くの地に秦野の名があるのは、肅政の一族の旧蹟に係るものらしい。これは、祖先の地を明らかにするに十分である。我が子孫は、そのことを永く記憶し忘れてはならない。」 天文23年甲寅(1554年) 1月11日

福岡家累代の墓 福岡平一郎(明治20年、熊野速玉大社参詣)

これによれば、福岡家は、秦の徐福の子孫であり、渡海して富士山麓に住み着いたのち、秦野に移り、後に、藤沢に移り住んだということが伺える。

尚、筆者が、山口県に移住された福岡氏に手紙で祖先の秦野での足跡を尋ねたところ、過去帳に、先祖秦太郎可雄 寿八十三、応永二十六(1419)巳交歳八月七日に、秦野今泉村「光明寺」(現在大岳院に習合)に葬るとあった。妻千世は、応永(三十二(1425?))乙酉年四月四日、秦野村 金蔵院葬 寿百 ということである。

また、神奈川の徐福伝承を、日本で最初に紹介した奥野利雄氏は、2002年の徐福シンポジウムで次の言葉を残しておられる。即ち、徐福の子孫としてはっきりしている遺跡の伝承地は、藤沢市の妙善寺だけである。

徐福さんと神奈川

奥野 利雄

徐福さんは秦の始皇帝の命をうけて童男女三千人を引き連れて、不老長寿の霊薬を求めて紀元前二一九年中国の斉の国（現在の山東省）を出発して九州佐賀に到着し、ここに数年滞在して更に東に進み、串木野や宮崎を経て黒潮に乗って熊野灘の新宮付近に上陸した。

気候温暖で海・山の幸の多い新宮にしばらく滞在し、医薬のこみや農耕・漁業（捕鯨）や和紙の製法など弥生の新しい文化を伝えました。更に黒潮に乗って新天地を求めて東に進み、遠州灘から霊峰富士山を目指して山麓の富士吉田に到着し永住した。

徐福さんには七人の男子と三人の女子があつた。長男福永は後に福岡と改称、次男福万は福島と改称して一族五十余名を従えて熊野に移住し、その子孫は社祠を建てて徐福の霊を祀った（阿須賀神社内徐福宮）。三男徐仙は福山の姓を称し、四男の福寿は福田と改称した。

徐福は第八代孝元天皇七年二月八日（紀元前二〇八年）七十才で逝去した。

徐福から四代目の福仙が大神宮の神官に任ぜられ、代々これを継承し、徐福が書いたといわれる富士古文書や宝物を守護してきた。

三十代福岡徐教の時、富士山の噴火の際大宮司と共に古文書宝物等を擁護して共に相模国高座郡に移住した。現在も藤沢市の妙善寺には「福岡子孫累代之墓」がある。

その子孫の福岡平一郎氏が明治二十年四月二十六日に元祖徐福供養のため、熊野新宮市の速玉大社に参詣し、累代家蔵の唐李昌帖巻冊と木製香焼（但菊水蒔絵）巻個を奉納している。

以上簡単に徐福さんと神奈川県との関係について述べましたが、徐福さんの子孫がはつきりしているのは藤沢市の妙善寺だけで、二千有余年に亘る日中友好の遺跡として日本で唯一の伝承地であると確信しています。

2002年11月15日
新宮にて

4. 秦野の徐福伝承

藤沢の福岡家墓碑から、徐福の子孫の旧蹟は藤沢に近い「秦野」の地であったことが分かる。

秦野の伝説を資料から探ってみたところ、果たして、徐福渡来に関係しそうな2つの伝承が存在したことが判明した。（岩田達治著「丹沢山麓 秦野の伝説」(S55.7.1)）

徐福の子孫は、「からこさん」と呼ばれ、大磯から上陸して秦野に定着したという伝承、丹沢山系から降りて定着した「からこさん」の伝承である。

1) 海上ルートの徐福一行？

秦野の伝説によると、「からこさん(唐子さん)は、中国からおいでになり、大磯の浜辺から秦野に移住したと伝え、徐福一行(の子孫)ではないか」と考えられている。

定着した場所は乳牛(ちゅうし、町名)とよばれ、今の秦野市中心街・本町である。かつて、唐子明神社が存在したが、現在は郷社・曾屋神社に習合されてしまっている。該当場所は、現不動尊の南約200m付近であると言われる。

2) 内陸ルートの徐福の子孫

秦野市の北部横野にある大秦野ゴルフ場・戸川公園の近くに、加羅古神社がある。ここにも「からこさま」に関する民話があった。「ずっと昔の昔、大むかしのことです。丹沢山塊の高峰、孫仏さま(今の塔の岳)の山頂に、からこさまが、おいでになったのです。からこさまは、里を見下ろされ、静々と山を降りられたのです。そして、やっとのこと、横野村(北地区横野)にお着きになったのです。それからは、いろいろと村人のために尽くされ、とうとう神様としてあがめたまつられました。そのお宮さまが、横野の鎮守さま「唐子明神社」(加羅古神社)です」と。

5. 富士山麓と秦野の徐福伝承のつながり

この話は、富士山麓の徐福伝承とつながりを持っていた。即ち、山梨県南都留郡山中湖村沖新田地区には、徐福の子孫の秦一族が住んでいたが、延暦19年(AD800)の富士山大噴火で、今の神奈川県秦野市に移住したと言われている。

郷土史家・渡辺長義氏大胆な仮説

「富士山麓・沖新田地区は、徐福の子孫の秦(はた)氏一族が住んでいたところであるが、1170年前の延暦十九年、富士山大噴火で、いまの神奈川県秦野市に移住した。金印は、おそらく徐福の一行が持ってきたのではないか。」



金印の写真

この「金印」は山中湖の長生村(徐福一族が住んでいた長寿村と言われている。現在は長池村になっている)の栗林遺跡の近くの畑を羽田正次氏が耕して発見された。

しかし、最初は「秦」と読まれて秦氏の印鑑と思われていたが、1991年に中国徐州博物館の李氏によって、中国三国志の時代の將軍の印鑑である事がわかった。読み方は「己大方」(みたいほう)と読み、三国時代の「呉」国の「黄巾軍」の大將の呼び名である。

三国志の記録によると呉の皇帝孫権は西暦230年に、徐福の子孫が住むという瀛(えい)州(富士北麓)に衛温と諸葛直に一万の兵を与え東海に繰り出し応援依頼に向かわせた。

この金印がAD3世紀のものとなると、卑弥呼の時代と重なるので、その重要性に注目しなければならない。呉の將軍の印であることが公表されれば、今後、歴史学会でも大変注目されることになると思われる。

6. 秦野市蓑毛の大日堂の秦野由来碑

6.1 秦川勝の碑

この地が「秦野」と名付けられた由来が「秦氏」の開拓にあるとすることは、多くの人々が長い間信じてきた。それを伝える碑が、蓑毛大日堂の境内に2基と、個人の墓地になるが室町(養泉院)にも1基存在する。何れも**秦川(河)勝に関するもの**で、大日堂境内のものは、共に川勝が五大尊(不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉)を祀るために来訪し、土着したとの伝承である。(秦野市立桜土手古墳展示館館長 星野隆夫氏による。)

秦野市室町にある養泉院(天台宗)には、秦始皇帝子孫・秦河勝の後裔(元秦野町長)と刻字された墓が存在している

6.2 大日堂石碑文言

蓑毛山大日如来 老晃三国寂初不動(左側) 応神天皇十五甲辰年 自唐土秦苗裔
守護来応當山後又往 故名称里於 **秦後孫 秦河勝** 再加力云云
(右側) 天竺毘須揭宝作 天平十四(742)壬午年 正月十八日創建也

仁王四五代 聖武皇 勅願所 享保十五年(1731)作成 秋月吉祥日

また、天保七年(1836)に書かれた「蓑毛村明細長」等にも、秦川勝の伝承を載せている。室町のものは個人のものである。

秦野は、山城を本拠とした秦氏の一族によって開発されたところである。

6.3 秦川勝と徐福の関係

蓑毛・「法蓮寺縁起」によれば、秦野蓑毛の大日堂安置の五大尊は、印度の懼曇沙弥に顕現し、毘首羯によって刻まれたという。始皇帝二九年(BC217頃?)、沙門室利、梵語で吉祥たち18人が、秦に持ち込んだが、始皇帝は彼らを殺そうとした。そのとき徐福が彼らを救ったため、宝仏は全て徐福に遣わされた。

応神天皇十五年のとき、秦始皇帝の後裔が、本朝に持ち込み、しばらく山城に留められた。

仁徳天皇のとき、やはり始皇帝後裔によって、相模の国、足柄上郡に安置されたという。そこで、この地を秦のという。そして山城の地を太秦と呼んだ。

始皇帝の後裔・秦川勝は、五大尊を祀るために、山城から秦野に来訪し、しばらく止まったと考えられる。

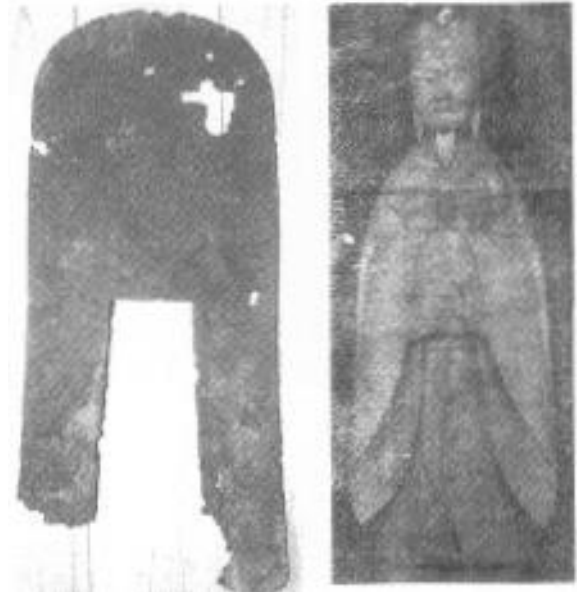
徐福と秦川勝は、血脈関係にはないようだが、秦始皇帝の後裔が、徐福が遺した五大尊を奉じ、徐福の後を追って列島に渡来したことで、つながりをもつことになる。

7. 神奈川県北部の徐福伝承

神奈川県北部にも徐福伝承をもつ家系があった。そして、藤野の小淵・栗原家には伝徐福持参の鈿?があった。(稲葉博著「神奈川の古寺社縁起一知られざる伝承・霊験譚一」(暁印書館、昭和63年4月))

県北部・旧津久井郡の西端で、山梨県上野原町まで数Kmのところ、藤野町小淵に三柱神社・峰昌寺の後裔が栗原家・現当主は穀氏、に徐福縁起があった。

それによると「唐土大明神之由緒一宝暦五年十月」。「本朝第六代孝安天皇の御代、秦始皇帝、長命不死の薬を東に求め、徐福にこれを命じた。出発に当り始皇帝から肖像画を賜った。徐福は日本の九州筑紫に到着し、中国筋を経て東国に至ったものの、悪者どもが群がって到底進み得ず、止む無く本国に帰ることとしたが、折角の記念にと帝の尊像を当所の裏手、鷹取山の中腹の大岩石の下に埋めて去った、という。



8. 相州大山一阿夫利神社のご祭神は徐福!?

相模の人々が信仰対象としている大山阿夫利神社は、関東総鎮護の役割を担っている。阿夫利神社のご祭神は、山の神・大山祇神である。

大山祇神は、「徐福」をさすという説があり、信憑性が高い。たとえば、須田育邦氏は、その著書「八雲立つ」で大山祇神は「徐福」であると確信して記載されている。

榎本富夫氏は、歴史研究392号(1994.1)において、千葉県葛飾郡沼南町大井の福満寺の祭神と佐賀市金立神社の祭神の対比から、**大山津見命を「徐福」と比定**されている。

大山阿夫利神社の由緒書によれば、神社創立は、今から2200余年以前(徐福渡来の時期に合致する)の人皇第十代崇神天皇の御代であると伝えられている。古来より大山は山嶽神道の根源地であり、別名に雨降山、**古名を「大福山」と呼ばれていた**。大山祇神は、またの名を酒解神(サカワケノカミ)と言ひ、**酒造の祖神**としてもあがめられている。また、生活の資源、海運・漁獲・農産・商工業に靈験を示されるということは、徐福の特徴をよく反映している。

碓井静照氏の著書「徐福の謎」によると、徐福一族は、各地に定着するにあたり、あらかじめ目標を定めた山(その地域で一番高い山)に立ち、海や河川を望み、最も住みやすい地を選んで山を下りたと見られる。これが後に、土地の人々において、神の降臨伝承となった可能性が高いという。また、磐楠船が八十鶴によってかきあげられ、ご神体の一つになっている。これは徐福一行が乗った厳めしい船のことではないか？(注1:徐福は、**富士吉田の伝承では、没して鶴になったとつたえられており、鶴に連れられて降臨**)した鳥之石楠船命は、徐福の子孫ということになる。

9. 相模の一宮・寒川神社のご祭神も徐福か

相模川の河口近くの高座郡に、相模国一宮となる寒川神社がある。寒川神社の社誌付録に「宮下文書」が付いている。その中には、ご祭神の寒川比古命は、大山祇命であるとしている。また、寒川姫命は、別雷、加茂澤姫命であり、その娘・菊理姫は、いみなコノハナサクヤヒメという。大山祇命が、「徐福」を表すものとすれば、寒川神も徐福ということになる。富士古文書に関する伝承が残っており、富士・高天原の川の名にちなんで寒川神社を創建し、伝来の文書を保管したという。

宮下文書の記事(相模国寒川日記録第43巻 宮司宮下減太夫義仁)

人皇五一代桓武天皇延暦十九辰年三月始め、福地山より熱湯72箇所より焼出し、人馬限らず、草木まで皆滅す。

別当行満寺丹波丹治比高座郡牧の沖に住居なり。此れは大山祇命の遠孫なり。福地山の中央大室の地より、3百余人伊勢参宮の者ともに途方にくれ悔む。同二三年申年三月七日、勅命にて古郡川辺に寒川神社を建立し、この祭神大山祇命より、国狭槌尊までの先祖代々を祭る。応神天皇明仁政元2皇子並びに、木花咲夜姫尊を合せ祭る。

国狭槌尊は即ち農狭という人である。**大山祇命は即ち寒川比古命という。**

寒川姫命はいみな別雷ともいい、加茂澤姫命という。**寒川比古寒川姫の娘菊理姫はいみな木花咲夜姫尊という。**東北国にては、天照御神と唱え称す。

明仁親王日本想山を司取るによりて、いみな山守王命という。中略 福地山中央大室の原を神都と唱すなり。**大山祇命は、寒川比古命であり、かつその子がコノハナサクヤヒメであるという。**

10. 丹沢山系は、徐福一行の霊薬探索地1?

富士山東麓の道志川の伝承は、大山が徐福一行の開発であることを証言

江戸時代に大山講を通じて大いに賑わった基点になったのが伊勢原町であるが、「伊勢原町勢誌」p132には、次のような記載があった。

「大山の山岳信仰に関連して、山梨県の道志村に残る伝説で、秦の徐福が蓬莱山なる富士に不老不死の仙

薬があると聞き及び、五百人の童男童女を使わして求めたけれども得ること難く、たとえ幾年ついやそうともこの秘薬を手に入れぬ内は、帰国を許さずと厳命した。やむなく五百人の使者は土着して、相州大山までの連山を訪ね探して秦野に移住し、御正体山・地藏ヶ岳・薬師ヶ岳・丹沢山から大山を、神仏に祈り探して、この地を蓬莱山と呼んだ。しかしめざす仙薬は遂に見当たらず、五百人の男女はここに帰化してしまった。」

つまり、徐福一行は、リーダー徐福の厳命で、不老長寿の仙薬を求めて、秦野に移住し、蓬莱山と呼んで帰化してしまった。

10. その他神奈川県内の徐福関連の地名等

1) 秦野の地名と遺蹟

秦野: 秦野市を含む周辺は、古代「幡多郷(はたごう)」といわれるように、秦氏族と深いかかわりがある。相模川上流の猿橋町秦野の八幡も相模の秦野に由来するという(窪田薫、富士北麓の秦氏二重構成説、秦武栄「徐福ロマン」特別寄稿)。

秦野市は、秦河勝の一族が移住し、この地を開発したとも伝えられている。

2) 伊勢原、平塚(史記に述べる徐福の止まるところ、平原広沢)

日向薬師: 伊勢原市日向に、大化元(646)年開創と伝えられる日向薬師があり、山門下に境内社として秦氏族の祀る白髭神社がある。

広沢寺: 七沢にある武田氏による建立寺。平原広沢に由来。

3) 相模(さがみ)

この名称も、サ・カミつまり「山の神」や「農耕神」を意味するという説がある。日本の徐福伝承には、徐福は人々に農耕を教えたとあり、伝承地の多くが徐福を「農耕神」として祀っている。サガミの神も「徐福」を表しているのではなかろうか。

4) 丹沢: 徐福一行が捜し求めた、丹(朱、辰砂)の採れる山、沢を意味している。

平原広沢の沢は丹沢とも解釈できる。金達寿氏は、古代韓国語の深い谷間の意味で、沢も深谷の溪流をさす、というのが、徐福一行が神仙の霊薬として求めた、辰砂と考える方が妥当。

5) 神奈川

東海道名所図絵には、それ神奈川という名は、昔、大足彦忍代別天皇(景行天皇)40年6月、東夷反逆の由、日本武尊東国安泰すべしとの詔で、当地にきたとき、宝剣が前の川の水底に映り、金色の光をなしたので、この地を金川と号した。その後、源頼朝が関八州を巡視されたとき、金川に泊まり、金は西を司り、西即ち上に当たって皇城である。神大いに示す地であるということで、神奈と改められた。神流川(かんながわ、群馬にある)と同じ意味か。

4) 蓬莱

蓬莱町: 横浜市中区に蓬莱町がある。

ほうらい: 秦野市本町下流の室川には、ほうらい橋がかかっている。付近には、ほうらい公園、ほうらい会館、ほうらい児童館などが建てられている。

5) 大住郷

大住郷: 伊勢原から秦野にかけての古代地名。王住郷とも考えられ、史記の徐福が王となって止まるというのに対応するかも知れない。秦野の隣・平塚には高間原と呼ばれた地があった。

6) 三浦半島の秋谷地区の丸石は、徐福が持ってきた！！

赤埴和晴氏の説であるが、神奈川県三浦半島の西岸、横須賀市秋谷の道端の安産祈願の球形の「子産石」が置かれている。この地域に集中して丸石が埋まっていることから、座礁船のバラストであると見ている。古代の外洋構造船としては、徐福一行の船によるものではないかという訳である。

7) 丹沢の前山の「シダンゴ(ウ)」山は、徐福文献に載る「支那震旦国」の由来を示す山と伝えている。

富士古文献に出てくる、徐福一行は、古代中国「支那震旦国」から渡来したことになる。

2 徐福伝承を伝える人々（無学祖元・寛輔・空海・良弁と徐福）

1) 相模の徐福伝承をつなぐ筋道

神奈川県藤沢市の妙善寺にある福岡家の墓碑には、同祖先が秦氏を称し、徐福の子孫であることを明記されている。

- 1) 藤沢市妙善寺の福岡家の墓碑には、徐福の子孫であることが明記され、祖先は秦野から来たとされている。
- 2) 富士山麓に土着した徐福一行の子孫が、延暦19年(800)に富士山の大噴火が起り、大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したとの伝えがある。
- 3) 秦野市横野にある唐子神社の御祭神(からこ神)は、富士山から丹沢山系を越えてきた、徐福の子孫であることを伝承していた。
- 4) 藤野町・栗原家には、徐福持参と伝える木像(昭和39年焼失)と鉄鍬が存在していた。栗原家は、聖武天皇の時代に、奈良から藤野に移住した貴族の子孫という。
- 5) 寒川町・寒川神社に徐福文献とも称される「宮下文書」が存在した。富士古文献とも呼ばれ、富士山の爆発を逃れて、相模川下流に移動したと記す。
- 6) 秦野市蓑毛の大日堂を管理する宝蓮寺の縁起書には、大日堂の五大尊が、徐福に関係するものであることを伝えていた。
- 7) 鎌倉市の円覚寺は、徐福に関する漢詩を新宮に残した禅僧・無学祖元の開山寺であった。つまり、徐福情報は、仏教を通じて神奈川に浸透していた可能性がある。

2) 禅僧・無学祖元と徐福

紀伊半島の徐福上陸の伝承地・新宮市には、最初にこの地の徐福の祠に言及した鎌倉時代の禅僧・無学祖元の詠んだ漢詩の碑「[徐福祠献晋詩](#)」が保存されている。

尚、無学とは、既に学ぶものがなくなった、完全な学者を意味している。

無学祖元の詩碑碑文は、「先生採薬未曾回 故国山河幾度埃 今日一香聯遠奇 老僧亦為避秦来」先生薬を採りて未だ曾て回らず 故国の関河幾塵埃、今日一香聊か遠きに寄す 老僧亦た秦を避けて来ると為す。自分自身を徐福に重ねあわせて詠んでいる詩で、当時の中国では、徐福の上陸地は紀州熊野であったと認識されていたようである。つまり、宋僧の無学祖元が元朝支配から逃れ来日し、渡来した徐福の境遇と自らを重ね合わせ、弘安4年(1281)頃、作られたもので、確かな文献による熊野での徐福伝承の初見とみられている。

3. 秦野宝蓮寺と徐福および無学祖元の関係

秦野市蓑毛・臨濟宗宝蓮寺の縁起書には、徐福や秦始皇帝の話が出てくる。

「後秦の始皇帝29年(BC220頃?)、沙門室利、梵語で吉祥という。彼ら18人が、印度から辰旦(秦国)に来た。舍利梵夾等の佛、宝物、閻浮檀金、大悲像、五大尊、金剛力神などの秘佛をもち来た。そのとき始皇帝は、異俗

を嫌って、彼らを殺そうと欲した。

そこで、「徐福」は、奏上していわく、「公、仙道を求め欲するなら、殺してはなりません」と。すると始皇帝は彼らを獄に禁令した。そして大悲五大尊の力により、彼らは獄を出ることができ、宝物を皆、大公徐福に遣わして、18人は皆印度に帰ることができた。

その後、秦の始皇帝の裔が彼の五大尊悲像を守護して、80余年にして大日本国の応神天皇15年甲辰に、佛宝物大悲像、五大尊と共に、秦苗裔であると申して、本朝に渡来した。

かの秦の苗裔は、東州に下向して、千手観音像を駿河国の有度山に、五大尊は相模の国、足柄上郡に安置された。」宝蓮寺は、無学祖元の弟子・高峰顕日が中興の祖となる寺である。

4) 日本の徐福情報を中国に伝えた弘順大師賜紫寛輔

釈義楚の『義楚六帖』によると、顕徳五年(958)日本僧弘順大師が、「徐福は各五百人の童男童女を連れ、日本の富士山を蓬莱山として永住し、子孫は秦氏を名乗っている」と伝えたとある。

『六帖』(955年に成書、一名は義楚六帖)を著わした義楚は、五代の後周の高僧である。この『六帖』は仏教の立場で書かれており、正史ではないが、徐福の得た「平原広沢」が日本であると指摘した中国初の文献である。

寛輔は延長五年に寛建の従僧として渡海した真言宗・密教の僧侶だったらしい。

5) 弘順大師賜紫寛輔は真言密教ルートで徐福の情報を得たか

①空海: 日本人として最初に、真言密教の奥義を究めたのは、弘法大師空海(774-835)である。空海は、佐伯氏の出で、15歳の頃、論語・孝経・礼記・春秋左氏伝や、儒教的な「経書」以外の道教的な「緯書」も学び、神仙や陰陽道など雑多な関心をもっていた。

華嚴経や雑密(ぞうみつ)に関心が深めたが、東大寺の別当となった良弁(ろうべん)がこの雑密の修行者である。

一方、良弁が開山になる相模国大山寺縁起によると、大山寺の第三世(3代目住職)は、真言宗の開祖・弘法大師であるという。

このことから推定すれば、真言宗僧侶の弘順大師寛輔は、弘法大師の教えを受けて、日本の徐福伝承の情報を得た可能性がある。それも、相模大山寺の住職経験をもつ弘法大師が、秦野において「徐福伝承」を聞き知ったことに、原因がありそうである。

②良弁

大山寺の開山は、良弁僧正である。良弁は秦氏である。良弁を通じて秦氏のもつ徐福情報が、弘法—弘順と伝わり、中国の後周の僧・義楚「六帖」に記載されることになったと考えられる。

良弁(689-773)は、聖武天皇の時代に、奈良大仏建立を提言した人である。東大寺の初代僧正となっているが、最近の研究によると相模国・北矢名漆窪(秦野市)の出身とされている。

まとめ 日本における徐福伝承の流れ

相模には、秦始皇帝に不老長寿の仙薬を勧めた方士徐福が、蓬莱の島を求めて日本の紀伊の熊野に落ち着き帰化し、その子孫が富士山麓に土着し、延暦19年(800)に富士山の大噴火が起こり、大きな被害を受け、やむなく秦野に移住したとの伝えがある。

神奈川県徐福伝承は、これら秦氏の流れ、山岳神道や熊野修験道および弘法大師開創の真言宗や臨濟

宗を中心とした仏教展開の流れにのって、古代から伝わっていたことが考えられる。

彼らは、九州、瀬戸内海を渡り、熊野、三河、駿河を経由し、大磯に上陸した。そして、秦野、藤沢を含む関東平野(平原広沢)へと広がっていったと思われる。そのルートは、次のようなものが考えられる。

九州(串木野、日向、佐賀諸富町)→瀬戸内海(大三島?)

→紀伊熊野・新宮→三河湾(熱田、小坂井)

→富士山麓(吉田)→相模(秦野、藤野→藤沢、鎌倉)

→(八丈島、伊豆諸島)→千葉→秋田→青森小泊、北海道

一方 八丈島から、伊豆半島を通して、富士山に行ったという説もあるが、三浦半島や大磯に漂着した一行が、相模、秦野に、移動し、富士山に向かった可能性もある。

要するに、神奈川は徐福と大きな関わりをもつ地域であると言える。